

## 私の学生時代

歯学部  
歯学科

教授 千葉 逸朗



昭和52年に北大の歯学部に入りました。受験の成績は3勝14敗1引分(補欠)。高校2年生の9月に決意してから4年半の歳月がかかりました。受験で衰えた体力を回復するため、高校時代にやっていたバレーボール部に入ろうと思っていたのですが、ボート部の先輩から「お前、いい身体してるな。ジギスカンでも食いに行かないか」と誘われ、何も知らない私は茨戸に連れて行かれ、ボートを漕がされ、ジギスカン



全日本選手権で第2位。手前中央が私。  
向こう側は優勝した滋賀銀行艇。

カンをご馳走になりました。若者がオレオレ詐欺に引っ掛かったような感覚で、気がついたらボート部に入っていました。それ以来、毎日茨戸と大学の往復で、奴隷のように艇を漕いでいました。後輩からは「Only power, no brain!」と言われ、それでもやっていました。大学時代に「俺はやった!」と言えるのはボートだけでした。おかげで新人戦で優勝し、4年生の時には歯学部の大会で優勝し、その勢いで全日本選手権に出て、何と2位(写真左)!

これが妙な自信となって、その後の人生に役立っています。若い頃に、そのエネルギーを使って、何か一つのことを打ち込んで、結果を出すというのはよろしいことだと認識しました。でも勉強の方はさっぱりだったので、このままno brainではダメだと思い、卒業してから大学院で頭を使うことを決意しました。学生の頃の病棟実習で口腔癌の患者さんを多く診て、その悲



留学先で。右が私。中央は大学院の頃の恩師。左はボス。

惨さに心を動かされ、北大医学部の癌研に行きました。教室員の方々は英語の論文をスラスラと読み、理解し、略語もバンバン使い、日本にしながら外国にいるような感覚を味わいました。それでも半年もすると自分もその世界に溶け込んでいました。やればできると思えるようになったのはボートのおかげです。

その後、2年間米国国立衛生研究所(NIH)に留学し(写真右)、帰国後は口腔外科で助手として12年間臨床をしていましたが、ひょんなことから平成14年に北海道医療大学に参りました。本学に来て、「これが教育なんだ!」と実感しました。学生の諸君、君たちは素晴らしい教育を受けているということを忘れないでください。

# 私の学生時代

今、本学の教壇に立たれている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は千葉 逸朗教授と田村 至准教授のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

## 私の学生時代

リハビリテーション科学部  
言語聴覚療法学科

准教授 田村 至



丸山真男のような政治学者になりたいという途方もない夢を抱いて、東京の私立大学の法学部政治学科に入りました。学部の定員が千人の大きな大学だったので、大教室で先生が講義し、資料も教科書もなく学生はひたすらノートを取っていました。その頃の大学は、勉強は学生の自主性に任されており、学問は自ら独力で学ぶものという認識が、先生と学生に共通してあったように思います。卒業論文で取り組んだ「国家論」では、政治思想史が経済、歴史、宗教などを統合した手強い学問であることを痛感しました。

学生時代は、いろいろな分野の本を読みました。文学では、夏目漱石を愛読し、

お気に入りには「草枕」でした。長い休みには、ドストエフスキーの長編を読破するのが楽しみでした。感銘を受けたのは、心理学者フランクルの「夜と霧」。強制収容所での体験をつづりながら、人生の意味や価値に深い洞察をめぐらしており、座右の書となりました。

大学では、映画のサークルに所属し、見た映画の解釈を仲間と語り合うのが楽しみでした。池袋の文芸座など多くの名画座があったので、いろいろな時代の映画を見ることができました。なかでも「天井桟敷の人々」は、名優の演技と詩人プレバールの格調高い脚本が際立っており、フランス映画の魅力に眼が開かれました。多感な時期に本と映画を通して、人間の生き方について多くを学び、豊かな精神生活を過ごしたと思います。

卒業して会社員になりましたが、大学に戻りフランス文学、言語障害学を学び現

在の専門(高次脳機能障害学)に至りました。医療の領域は、教育・研究・臨床のすべてにたずさわり、幅広いコミュニケーションの機会を得られることが、素晴らしい長所と思います。

手のひらから宝石がこぼれ落ちるように時が流れましたが、蒔かれた種は、長い時を経て実を結ぶものと思えるようになりました。両親およびお世話になった先生方に感謝の意を表するとともに、私が受けた学恩を多くの若い人々に還元したいと思っています。



卒業式にて